

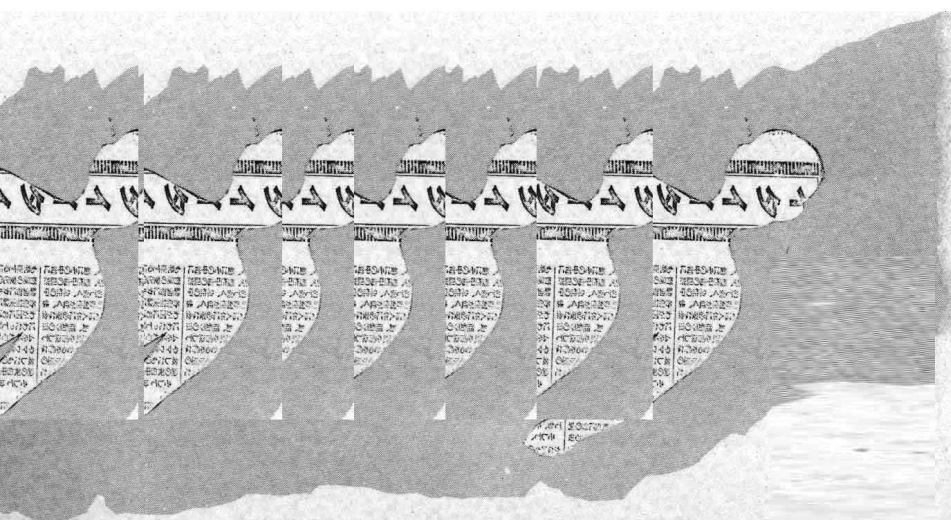
川を喰う骨

イタイイタイ病の記録

毎日新聞社編

骨を喰う川

イタイイタイ病の記録



筆者紹介

松永俊一	毎日新聞大阪本社社会部副部長
永田 孝	毎日新聞大阪本社社会部員
佐藤 茂	”
伊藤延司	”
神谷周孝	毎日新聞富山支局員
観堂義憲	”

骨を喰う川

イタイイタイ病の記録

¥ 550

昭和46年 8月10日 印刷

昭和46年 8月20日 発行

毎日新聞社編

編集人 浜田 琉 司

発行人 朝 居 正 彦

発行所 毎日新聞社

〒 100 東京都千代田区一ツ橋
〒 530 大阪市北区堂島上
〒 450 名古屋市中村区堀内町
〒 802 北九州市小倉区紺屋町

印刷／凸版印刷・製本／正文社

<検印省略>

0036-666500-7904

はじめに

昭和四十六年六月三十日。富山地裁で行なわれたイタイイタイ病の第一次訴訟は、患者側の全面的勝利という歴史的な判決を下しました。富山県神通川流域の農家の主婦を全身の骨折と激痛でさいなんだイタイイタイ病が、上流にある三井金属鉱業神岡鉱業所の流したカドミウム中毒による公害病ときめつけられたのです。

この裁判は数十年間、苦しみ抜いてきた多くの患者たちが報われたというだけではなく、日本の公害裁判の第一号でもあり、四大公害裁判といわれる今後の四日市ゼンソク、熊本の水俣病、新潟の阿賀野川水銀中毒訴訟などへ与える影響も大きなものがあります。

いま各種の公害反対運動が、全国でくり広げられています。その意味で、イタイイ

タイ病とのたたかいの歴史は、そのまま現在の公害闘争、住民運動への教訓でもあります。

毎日新聞社では、大阪本社社会部と富山支局を中心に編成したイタイイタイ病取材班が、判決前から、イタイイタイ病におかされ激痛にたえてきた農民、東京、大阪など各地からの正義感にあふれた弁護士、地元の支援団体や医師たちなど、イタイイタイ病判決勝訴を支えた人たち”の取材を続けました。まっ黒になった取材メモをたよりに、イタイイタイ病に取組んだのが本書です。公害裁判は、被害をうけている住民の側に立って進められ、判決がくだされるべきだというのが記者たちの信念でした。

これは毎日新聞社会部、松永俊一副部長以下、佐藤茂、永田孝、伊藤延司と富山支局、神谷周孝、観堂義憲の諸君がおもに執筆しました。

昭和四十六年七月

毎日新聞大阪本社編集局長

稲野 治 兵衛

目次

女の一生

雪山のみえる杉木立 こたち の村……………	一〇
奪われた女ざかり……………	一六
おかあさんがんばって……………	二四
嫁はやれんぞ……………	三〇
女系の病い……………	三三
ワラをもつかむ……………	三七
死が楽であるなんて……………	四〇

歴史の陰画

あくなき害毒……………	四八
鉋毒増産……………	五二
魔の時代……………	五五

告 発 者

水への疑惑……………六

土着の論理……………六

去る者と来る者……………七

現われたカドミウム……………六

死者とネズミ……………四

立ちあがった人たち

「できる」男……………三

ある握手……………五

「戸籍を賭けて」……………一〇

広がる支援の輪……………一〇六

ひび割れた光景

対 決……………一三

県は中立を守った……………二九

厚生省特別調査研究班……………一三三

公害の倫理……………一三七

亀 裂……………一三五

チミモリーヨ……………一四〇

鋳業法を足場に

墓にあやまれ……………一五〇

雨だ、流せ……………一五五

論より証拠……………一五九

走る？重症患者……………一六三

御用学者の登場……………一六八

死を賭けた証言……………一七一

勝利につながった鑑定却下……………一七四

前代未聞の弁護士交代……………一七七

岡村判決の骨子……………一七九

ゆりかごの公害裁判……………一八三

まだ死ねんちゃ

六月三十日	一九二
波紋とショック	二〇三
「三井」の金の出し方	二一〇
どこまでが患者か	二二三
「イス型」の恐怖	二二八
「敵」は企業だけでない	二三四
公害の起承転結	二三六
あとがき	二三二
資料 編	二三五
イタイイタイ病年譜	二五七
参考文献	二六五

骨を喰う川

——イタイイタイ病の記録——

装帧

大村
一彦

女の
の
一
生

雪山のみえる杉木立こたちの村

「ぎゃあーっ」、夫がおんぶしようとしたとき、小松みよは死にそうな叫び声をあげた。驚いてふとんの上へみよをおろした夫の俊一は、なおもうめき続ける妻をみて息をのんだ。背中に乗せたみよをちょっとゆすりあげようとした軽い動作が原因で、もろくなっていた彼女の足のつけ根の骨が折れてしまったのだ。

「痛い、痛い、少しでも動かされると痛い。このままじっとさせて……」

みよは哀願したが、この日はどうしても彼女を萩野病院へ運ばねばならなかった。激痛を訴えながら死んでゆく原因不明の業病のために、東京から「えらい先生」がきて萩野病院で待っているのだ。

激痛が一段落したところをみはからって、俊一は再びみよをかつごうとした。だが「痛い！痛いーッ」手をふれただけでみよは痛がった。あまりの痛みで呼吸が乱れると、こんどは胸が針で刺されたように痛いとうめきだした。呼吸するたびに胸の骨がキリキリと痛み、もう息もできない。

担架で運ぼうとしたが、それでもできなかった。からだにさわると、それだけでみよの顔は苦痛にゆがみ、痛みにうめいた。ふとんから担架へ移しかえることもできない。担架がゆれるたびに全身を走る激痛が彼女をさいなみ、死んでしまふかと思われた。結局、みよは、彼女が寝ていたふとんの下の畳ごと、自宅からわずか七、八十メートル離れた病院へかつぎこまれた。全身どこをさわっても痛く、ちょっと力を加えただけで骨折する彼女を運ぶにはこうするしかなかった。

たとえ、じっとしていても、痛みがひどい病いなのだ。身動きすれば、もっと痛い。無理にからだを動かそうとすると、胸や足の骨がポキリと音をたてて折れる。「痛い、痛い」――悲痛なうめき声をあげていたのは、みよだけではなかった。

富山県婦負郡婦中町。神通川左岸に広がる豊かな穀倉地帯。初夏には村や町をとりまく広い水田が青々と広がり、秋には金色の穂波が風にゆれる。大きな構えの、がっしりした屋根と柱を持った農家が多く、その一軒一軒は屋根の二倍以上も高い杉木立に囲まれている。田植え時には、神通川から農業用水路を通じてたっぷり水が田んぼへ流れ込んでくる。関東や東北の農村を見た人たちは口々にいう。「豊かな農村だなあ」

天気の良い日には、神通川のむこうに、日本の屋根、北アルプスの峰々がみえる。鋭い岩峰が青空にくだんでいる劔岳、古くから山岳信仰の山とされてきた立山、その南にはスカイラ

インになだらかな曲線をみせる薬師岳。どれも三千メートル級の高峰だ。

婦中町からは見えないが、薬師岳よりさらに南に、やはり日本の代表的な名山、穂高岳がある。その長野県側の山すそは上高地につながり、雪と岩を求める若い登山家やハイカーたちで夏には花やかなにぎわいをみせる。一方、その岐阜県側の山腹を水源として神通川は岐阜から富山県へと美しい峡谷美の中を急流で下ってくる。

富山県へはいってしばらく、神通峡と呼ばれる切り立った段丘の間を下ってきた神通川は、婦中町の隣町、富山県上新川郡大沢野町の笹津という古い宿場町あたりから広い富山平野へ解き放たれる。

万年雪の山に発し、絶壁の間を豊富な水量で流れてくるこの川は、下流の人たちが「神の通る川」としてあがめるにふさわしい美しさを持っていた。少なくとも、明治の初めまではそうだった。いまでも、見た目にはこの川は美しい。だが、この川の上流、高原川へ、岐阜県吉城郡神岡町の三井金属鉱業神岡鉱業所からカドミウムが流れ込んでいることは、長い間だれも知らなかった。一部、知った人たちはそれが毒物でないと思ひ込まれたり、あるいは流れ込んでいることを口外しないよう圧力をかけられたりした。

だから、だれもこの水を疑わなかった。大沢野町や婦中町の人たちは、この水を農業用水にただけでなく、炊事にも洗面にも洗濯にも使った。神通川からひいた用水路の水はいくつも



婦中町の南部地区。右手は神通川。この辺一帯はイタイイタイ病の発生地

の細かい流れに分けられて、このあたりのどの家の軒先にも届いていた。家の中にまでとり込んで、台所の土間の溝をたえず神通川の「清流」が流れるようにした家々も少なくない。

もとはといえば、このあたりに神通川の水をひいたのは、徳川時代の初め、百万石の加賀藩や、富山藩の努力だった。それまで荒れ野に近く、農民たちも食糧不足に悩まされていたが、藩は食糧増産のため新田開発をすすめ、このとき牛ヶ首用水もつくられた。この用水は初め、ずっと下流で神通川に流れこむ支流から水をとっていたが、開発が進むにつれ、水を神通川本流からもひくように改造された。工事に使用する木材を藩有林から

切り出させるなど、藩も積極的に力を貸し、青々とした穀倉地帯がひらかれていったのだった。

徳川三百年の間、神通川は文字通り清流だった。痛さにうめく病人の出現が文明開化の世におこるとはだれも知らないまま、平穏な時が流れ、稲は毎年豊かにみのり続けた。

婦中町の神通川中流域の光景は美しい。自宅をかこむうっそうとした杉木立を通して北アルプスの峰々をおおぎ、自然の水を屋敷内にひき入れて生活する——それは、もし水にさえ異常がなければ、過密都市に住む人たちには願っても得られないぜいたくだ。だから、婦中町の神通川流域地帯は、富山市からクルマでわずか二十分という富山県の中心部にありながら、カドミウム鉱害がはっきりわかるまで簡易水道さえなかった。それほど、神通川は信じられ、いわば「生活そのもの」だった。

美しい村、婦中町を中心に大沢野町、富山市南部などで「痛い、痛い」といううめきがあちこちの家できかれた。イタイイタイ病の対症療法が進んだ今でも、患者たちはちょっと働きすぎたり、体調をくずすとすぐ痛みがふり返すうえ、今なお新たに発病する患者もいる。この神通川中流域の一市三町の南北約十二キロ、東西約六キロにわたる一帯が患者の発生地域で、これを中心に患者の発生が心配されている地域がさらに広がっている。

地元、婦中町の開業医、萩野昇医博によると、この病気は五段階に分けられる。第一期は